

外務大臣賞

信号機

駒ヶ根市立東中学校 3年

佐々木 創

「ネパール人の生活には合わなかった。」

その言葉を聞いた時私は少し納得した。しかし私の中に疑問が生まれた。

私は今年一月に市の中学生海外派遣国際交流事業に参加し、ネパールへ研修に行かせて頂きました。ネパールの首都カトマンズとポカラを訪問し、日本との違いやネパール人のあたたかさを感じることができました。

研修中、カトマンズ市街をバスで移動している時に使われていない信号機をたくさん見かけました。最初の数基はただの故障だと思って見ていましたが通った道のほとんどの信号機が使われていなかったの、これは故障ではないとわかりました。しかしなぜこんなにたくさんの信号機が使われていないのだろう。ととても不思議に思い職員の方に聞いてみました。すると「日本や外国から寄付されたけど、ネパールでは停電が多かったり、規制が十分では無かったという事や信号機が古く、まとめて管理できない等の理由でネパール人の生活には合わなかったみたいだ。」と教えて下さいました。

私は説明を聞いて信号機が使われていない理由について納得しました。しかし新たな疑問が生まれました。「なぜ使われる事も無いのにこんなにたくさん寄付されたのだろう。」そんなことを考えていた時、青年海外協力隊活動状況学習がありました。

協力隊員のお話を聞いている中で「アフリカで起きた蚊帳の寄付から始まった現地の悪循環」についての話がありました。悪循環とは外国から蚊帳の寄付によって現地の蚊帳職人がいなくなってしまう壊れた蚊帳を直すことができなくなってしまう。という話でした。この話を聞いて私は衝撃を受けました。

似たようなことがネパールでも起きていると思いました。今は使われていないだけの信号機ですがこの先処分しなければなりません。しかし寄付された物を処分するためにお金を使っているのはネパールにとってデメリットの方が大きくなってしまいます。私たちは兎角「寄付は良いこと」と考えがちですが全ての寄付が必ずしも良いとは限らないのだと知りました。

寄付するという行為は良い事だし大切な事だと思いますが、本当に必要なのは現地で何が必要とされているかを知り、現地の生活や経済に悪影響をあたえてしまわないかを考えて現地のニーズに合った物を贈る事だと感じました。

私の中には今もネパールで感じた事が残っています。これからもその事を胸に刻み、自分ができることは何かを今までより少し深く考えながら生活していきたいです。